

昭和 30 年代の川崎病症例に関する研究

分担研究者 賀藤均，柳澤正義 東京大学医学部小児科

研究要旨：東大小児科に昭和 30-40 年の 11 年間に入院した症例のうち、アレルギー性中毒性発疹、Stevens-Johnson syndrome、結節性動脈周囲炎の 3 病名につき検討したが、今日の川崎病の診断基準に適合すると思われる症例が 5 例得られた。診断基準を満たさずとも疑わしい症例もあり、昭和 30 年代の当科において川崎病の入院が少なからずあった可能性を示唆するものである。

A．研究目的

川崎病は 1967 年（昭和 42 年）に川崎富作氏によって「指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」として発表されてから 30 年以上が経過し、何回もの全国調査が重ねられ、その疫学については詳細なデータが得られているが、昭和 40 年以前の症例についての報告は少ない。今回我々は昭和 30 年から 40 年の間に当院小児科に入院した患者のカルテを調査し、今日の川崎病に該当すると考えられる症例を検索したので報告する。

B．研究方法

昭和 30 年から 40 年の間に当院小児科に入院した患者のカルテより、アレルギー性中毒性発疹、Stevens-Johnson syndrome、結節性動脈周囲炎と診断されたものを抽出し、症状、検査所見、経過などを調査した。また、厚生省川崎病研究班の作成した川崎病診断の手引きと照合し、川崎病との異同ついて主要 6 症状の有無を中心に検討した。

C．結果と考察

昭和 30 年から 40 年の間に東大病院小児科に

入院した患者 9001 名のうち、アレルギー性中毒性発疹、Stevens-Johnson syndrome、結節性動脈周囲炎と診断された患者はそれぞれ 27 例、8 例、2 例、合計 37 名であった（表 1）。アレルギー性中毒性発疹は 30 年代前半から半ばに多く、Stevens-Johnson syndrome は 30 年代後半に多かった。結節性動脈周囲炎の 2 例は同一患者の再発によるもので、いずれも昭和 31 年の入院であった。

上記の 37 例につき、厚生省川崎病研究班の作成した川崎病診断の手引きにおける主要症状との比較を行った。4 項目以上陽性と考えられる症例はアレルギー性中毒性発疹では 5 例、Stevens-Johnson syndrome では 6 例、結節性動脈周囲炎では 0 例であった（表 2）。これら 11 例の発熱日数は 6-20 日で、全例が発疹と結膜充血を呈していた（表 3）。調査した 37 例のうち、四肢末端の変化が記載されているものは一般に多くはなかったが、4 項目以上陽性の 11 例のうち 10 例にその記載があるのが特徴的であった。予後は全症例とも軽快または治癒にて退院していた。

主要症状 5 項目以上陽性の症例は今日の診断基準を満たすものであり、川崎病と診断し得る

が、アレルギー性中毒性発疹では 3 例、Stevens-Johnson syndrome では 2 例存在した（表 4）。これら 5 例の年齢は 8 か月から 3 才 9 か月で、今日知られている好発年齢と一致していた。最終診断までに溶連菌感染症、敗血症、ペーチェット病などが疑われており、診断に苦慮していた様子が伺われる。発熱日数は 7-20 日で、全例に抗生物質が、1 例を除く 4 例に副腎皮質ステロイドが投与されていた。症例 1 は第 8 病日頃より意識混濁があり、脳波所見より脳炎の合併が考えられたが、第 11 病日以降に改善し、全治退院した。川崎病に特異的とされる指先の膜様皮膚落屑が認められている。症例 3 は入院時炎症所見著明で敗血症と診断され、輸血も行われた。症例 5 は入院後に黄疸と肝腫大が出現し、肉眼的血尿もあったためウイルス病を疑われ、抗生物質の大量投与とウイルス抗血清による治療がなされた。レプトスピラ凝集反応は陰性で、経過を一元的に説明するものとして Stevens-Johnson syndrome と最終診断された。川崎病が疾患単位として確立されていなかった時代に、原因不明の長期の発熱に対し、診断と治療にかなり難渋していたことが想像された。

頻脈に対して digitalis を用いた症例が認められたが、明らかな心血管系の合併症については不明であった。（1 例のみ、診断基準を満たさないが、心拡大と心電図所見より Myocarditis とされ、回復期に指尖皮膚の膜様落屑を記載された症例があった。）

全例軽快または治癒にて退院しており、その後の経過については不明である。

D．結論

東大小児科に昭和 30-40 年の 11 年間に入院した症例のうち、アレルギー性中毒性発疹、Stevens-Johnson syndrome、結節性動脈周囲炎の

3 病名につき検討したが、今日の川崎病の診断基準に適合すると思われる症例が 5 例得られた。診断基準を満たさずとも疑わしい症例もあり、昭和 30 年代の当科において川崎病の入院が少なからずあった可能性を示唆するものである。